

することが正しいことは必ずしも自分がしたいことではなく、むしろほとんどの場合、その逆である。正当な道徳的判断（倫理的判断）と欲求とのあいだのこの懸隔と対立は、カントによって最も鋭く描き出された。すなわち、この懸隔と対立ゆえに、自分一己の幸福をめざす傾向性によって意志を規定される有限な理性的存在者である人間にとっては正しい道徳的判断は当為（べし）となり、その道徳的指令を発する道徳法則は、自然法則が因果的に支配し、そのなかで人間が傾向性に影響されて生きている現象界を超えた英知界のものである。それゆえ、人間がその道徳的判断にもとづく善き行為、正しき行為を為すとは、現象界という経験的次元を生きる人間が経験的次元を超越した道徳法則の認識を介して経験的な次元へと超越する——いわば、現象的人間から本体的人間へとみずから超越する——ことを意味している。カントでは、自分は道徳法則にしたがうこともできると意識して傾向性による意志の支配からの自由になる可能性を認識する理性の事実によって、ショーペンハウアーでは、自分が他者を苦しめているそのことに苦痛を感じる良心の呵責によって、英知界の存在は経験のうちに示唆される。その説明は英知界から出発して現象界へ向かうので、経験的次元を超えるものについて語る形而上学によってなされる。

だが、一九世紀後半の実証主義は形而上学の「首を切り落とした」（フッサール）。実証主義は、自然から価値や規範を放逐した近代の機械論的自然観の嫡子であった。倫理学においては、二〇世紀の論理実証主義による情動主義が、道徳的判断を判断される対象にたいする判断主体の肯定的ないし否定的な態度を表出するものと説明し、真偽の区別ある命題であることを否定した。道徳的判断の述語である価値（たとえば、「よい」）は自然的な性質ではないためにあらためて説明されなねばならなくなった。道徳的判断や価値についての語りは、英知界の存在は否定されたのだから、私たちの経験的な次元に見いだされ生じるものから出発する営み、それどころかその範囲でなされるべき営みとなった。

価値の態度適合理論（fitting attitude theories of value。以下 FA 理論）はその一例である。この理論は、判断主体が対象にたいしてとる賛成的（反対的）態度を介して価値（無価値）を説明することで、自然的性質ならざる価値を脱神秘化し、その態度の適合性に照らして価値判断の真偽を区別する。いわばメタ倫理学上の分類であって、どのような価値を重視するかに応じて多様な規範倫理学上の立場と結びつきうる。私の関心は、経験的次元（主体による価値づけ）からそれを超えるもの（価値）に近づこうとするそのアプローチの方法にあり、私の疑問は、そのような道筋で、はたして善や道徳的判断にまで達することができるのか、善や道徳的判断は（実証主義による偶像破壊を経ても）依然としてそうしたアプローチを超越するものを示唆しているのではないか、という点にある。

本報告では、時間と報告者の能力のゆるす範囲で、FA 理論の一部をなす Th・スキャンロンの自然的な性質を介して価値を説明する「責任転嫁」の考え方、FA 理論を自称していないが道徳的性質は自然的性質に付随すると説く S・ブラックバーン、自然的なよさや自然的な評価を語り、またそれとは別に倫理的な評価を語る R・ハーストハウスの徳倫理学の試みなどに言及しつつ、上の問いを考える。最後に、人間を超えるものにたいする感覚がいまの状況にはむしろ必要とされていると報告者が考えるその理由を示唆したい。